

すぐに わかる えびののこと
いっき わかい えびのんこつ



むかし
昔
の
みんぐ
民具



しれきしみんぞくしりょうかん
えびの市歴史民俗資料館

もくじ 目次

1. 台所の民具だいどころ みんぐ 3～4

・水がめみず ・柄杓ひしゃく ・かまど ・火吹き竹ひふだけ ・羽釜はがま ・石臼いしうす

2. 食事をする部屋の民具しょくじ へや みんぐ . 5～6

・いろり ・自在かぎじざい ・めしびつ (おひつ) ・膳 (おぜん)
・ちゃぶ台だい

3. 水まわりの民具みず みんぐ 7～8

・手押しポンプてお ・洗濯板、たらいせんたくいた ・五右衛門風呂ごえもんぶろ ・便所べんじょ

4. 住まいの民具す みんぐ 9～11

・行灯あんどん ・石油ランプせきゆ ・白熱電球はくねつでんきゆう ・柱時計はしらどけい ・足踏みミシンあしふ
・炭火アイロンすみび ・ねずみとり ・ダイヤル式電話機しきでんわき ・有線ラジオゆうせん
・カラーテレビ

5. 夏の民具なつ みんぐ 12

・蚊帳かや ・蚊取器、蚊取線香かとりき かとりせんこう ・うちわ ・風鈴ふうりん

6. 冬の民具ふゆ みんぐ 13

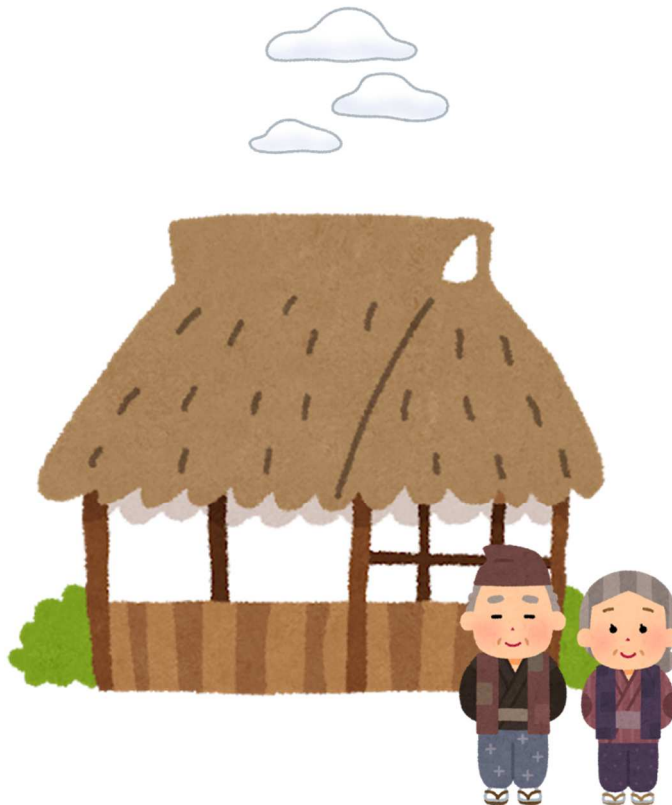
・火鉢ひばち ・こたつ ・湯たんぽゆ

7. 田んぼと畑の民具た はたけ みんぐ . 14～16

・犁すき ・馬鍬まぐわ ・田植え綱たうづな ・唐箕とうみ ・千歯せんば ・足踏み脱穀機あしふ だっこくき

むかし　　みんぐ　　むかし　　く　　なか
昔の民具とは昔の暮らしの中
で、生活していくのに必要だった
道具のことです。

めいじ　　たいしょう　　しょうわ　　じだい　　つか
明治・大正・昭和の時代に使わ
れていた民具を紹介します。



だいどころ みんなぐ
1. 台所の民具



むかし だいどころ しょうわ ゆか どま つち
昔の台所(昭和のはじめごろまで)の床は土間(土
をかためたもの)になっていました。

だいどころ みず ひ みず
台所にかかせないものは、水と火です。水

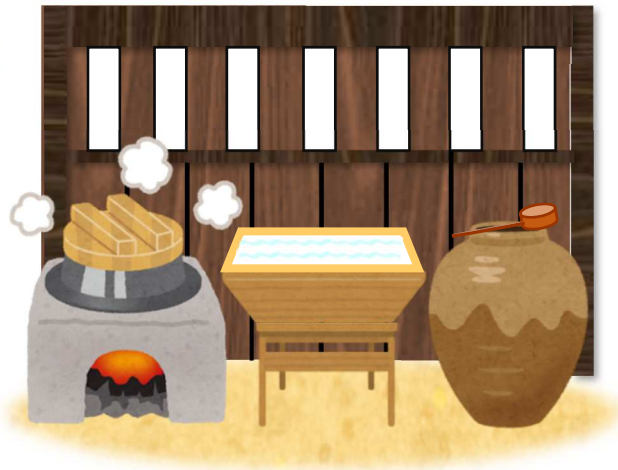
みず い しょっき やさい あら
は「水がめ」に入れておき、食器や野菜を洗い

ひ
ました。火は「かまど」

た すいはん ゆ
で炊いて炊飯やお湯を

わ
沸かしたりしていまし

た。



みず
○水がめ

ほうげん
方言：ハンズ

の みず りょうりよう みず あら よう みず
飲み水、料理用の水、洗いもの用など、水がめの

みず りょう
水を利用しました。



ひしゃく
○柄杓

ほうげん
方言：クシャツ

みず ほか もの うつ どうぐ
水がめなどから水をすくいとり、他の物に移す道具です。



参考文献：『昔のくらしの道具事典』P33

○かまど

ほうげん
方言：デプロ

なべ はがま うえ した まき
鍋や羽釜などを上にかけて、下で薪を
も 燃やして煮炊きする道具です。



○火吹き竹

かまどの火を吹き起こすときに用います。

たけ ふし あな ふきぐち いきふきこ
竹の節に穴があけてあり、吹き口から息を吹き込むと

あな で つよ かぜ ひ いきおま
穴から出る強い風により、火の勢いが増します。



○羽釜

かまどでご飯を炊くための道具です。

かまどにかけるつばの部分**が**羽のよう

な形をしているので、羽釜とよばれます。

参考文献：『昔のくらしの道具事典』P12



○石臼

穀物や豆をひいて粉にする道具です。

す。上下に重ねた石の間ですりつぶ

すことによって、そば粉や小麦粉な

どができあがります。

参考文献：『昔のくらしの道具事典』P158



2. 食事をする部屋の民具



だいどころ いちだんたか へや かぞく あつ
台所から一段高くなつたいろりの部屋で家族が集

まり食事をしていました。

いろりでは、煮炊きができ、

暖房や照明にもなるため、

家の中心となっていました。

参考文献：『昔のくらしの道具事典』P52



○いろり

ほうげん
方言：ユルイ

ゆか いちぶ しかく ひ た
床の一部を四角にあけて火を炊

いた場所です。家族の食事やお

客のもてなし、子どもが昔話

を聞くのもいろりの前でした。



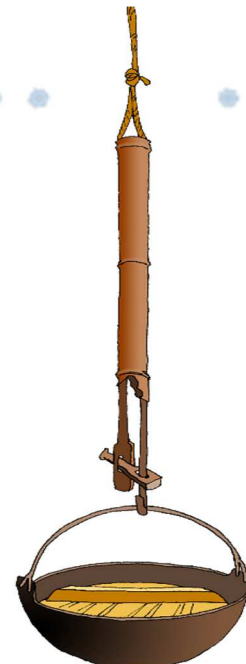
○自在かぎ

ほうげん
方言：ジゼカッ

いろりやかまどの上につり下げ、それにかけた鍋な

どの高さを自由に上げ下げできるようになってい

ます。



○めしびつ（おひつ）

はがま た 炊いたごはんは時間がたつと、かたくなってしまいます。そこで、炊きあがったごはんをめしびつに移しかえていました。



○膳（おぜん）

ひとり分の料理を台にのせて食事をしました。

※写真は高足膳



○ちゃぶ台

短い脚のある、食事をするための台です。

脚を折りたたむことができるものもあり、使わないときは部屋を広く使うことができました。



お膳を使っていた時代は、家長（主人）を中心にすわる場所も決められていましたが、その後、丸いちゃぶ台を囲む食事は、楽しい一家団らんのシンボルでした。

参考文献：『昔のくらしの道具事典』P62

3. 水まわりの民具



いま じゃぐち みず で
今は、蛇口をひねるといつでも水が出てきますが、

すいどう わ みず かわ みず 家庭用
水道のないころは、湧き水や川の水を家庭用の

みず つか
水として使っていました。

ちか みず
地下から水をくむための

いど つく
井戸も造られていました。



↑ 車井戸 方言：ツリン (釣井戸)

滑車を使って水をくむ井戸

○手押しポンプ

て じょうげ うご あつりょく
手でハンドルを上下に動かすと圧力におされ

みずぐち いどみず
て水口から井戸水がでてきます。

いどみず なつ つめ ふゆ あたた かん
井戸水は、夏は冷たく冬は温かく感じました。



○洗濯板・たらい

せんたくいた いるい
洗濯板は、よごれた衣類をきざみ目

にこすりつけて洗う道具です。

たらいは、せんたくするとき水を入れて

使います。

でこぼこしたところが、きざみ目



おおきなたらいは夏に子どもの水あそびやスイカを冷やすのに使われたりしました。

参考文献：『昔のくらしの道具事典』P71

ご えもんぶろ ○五右衛門風呂

どだい てつ かま まき した た みず
土台に鉄の釜をすえ、薪を下で炊いて水を
あたた かま そこ あつ そこいた
温めます。釜の底はとても熱いので、底板
がないと入れませんが、周りの鉄はさわっ
ても、やけどする心配はありません。



参考文献：『昔のくらしの道具事典』P74



あづちももやまじだい おお いしかわご えもん かま
安土桃山時代の大どろぼう、石川五右衛門が釜ゆでされた
ことから、五右衛門風呂という名前になりました。

べんじよ ○便所 (昔のトイレは便所、厠、雪隠などと呼ばれていました。)

ざしき ひ あ きたがわ
座敷からはなれた日の当たらない北側の
へや おもや にわ こや
部屋、また母屋からはなれた庭の小屋に
ありました。
べん によう べんき した おけ はたけ
便や尿は便器の下の桶にためて、畑の
ひりよう つか
肥料に使っていました。

むかし ゆか あな あ
昔の便所は床に穴を開けた
だけの簡単な作りでした。
よる いえ そと
夜になると、家の外にある
べんじよ こ 子どもたちにはくらくて
便所は子どもたちには暗くて
こわい場所でもありました。

参考文献：『昔のくらしの道具事典』P78



じょうすいどう えびののに上水道ができたのはいつ？

じょうすいどう しょうわ ねん ちゃっこう
えびのの上水道は昭和52年(1977)着工、
しょうわ ねん ぜんいき きゅうすい かいし すいげん
昭和56年(1981)全域に給水が開始されました。水源は
せんだいがわさいじょうりゅう きょうまたごろうだに
川内川最上流のクルソン峡又五郎谷です。



参考文献：『絵で見るくらしのうつりかわり』P2

4. 住まいの民具



あんどん ○行灯

明治時代にランプが広まるまで使われていた室内の明かりです。種油を入れた皿にしんをひたし、火をともして使います。持ち歩きができるように、上に持ち手がついています。

参考文献：『昔のくらしの道具事典』P85



せきゆ ○石油ランプ

石油にひたした“しん”に火をともし、ガラスのほや(火をおおうガラス製の筒)で囲んで使います。

参考文献：『昔のくらしの道具事典』P84



はくねつでんきゅう ○白熱電球 (1879年にトーマス・エジソンが発明しました。)

明治時代の中ごろに日本に登場し、大正時代には石油ランプに代わる家庭の明かりとなりました。参考文献：『住まいとくらしの100年』P85



でんとう えびのに電灯がついたのはいつ？



えびのでは大正7年(1918)に昌明寺と西川北に点灯され、翌年1月に真幸小学校に電灯がつけました。大正8年(1919)以降日をおって飯野地区、加久藤地区へと点灯地区は広がって行きました。

参考文献：『絵で見るくらしのうつりかわり』P12

はしらどけい ○柱時計

ゼンマイ（渦巻のバネ）で動き、柱などにかけておきました。

ネジでゼンマイを巻いておかないと止まってしまうので、定期的にネジで巻いていました。

参考文献：『昔のくらしの道具事典』P110



あしふ ○足踏みミシン

足でペダルを踏んで動かす仕組みになっています。江戸時代の終わりにアメリカから日本に運ばれ

ました。大正時代からは嫁入り道具の一つとなりました。



すみび ○炭火アイロン

明治時代に外国から入ってきました。

炭火をアイロンの中に入れてその熱

でしわをのばします。空気を入れる穴と煙突がついています。



○ねずみとり

昔の家は壁にすき間があり、そこからねずみが入ってきて台所の米などを食べました。

そこでねずみとりをしかけました。カゴの真ん中に

エサを置き、ねずみが入ったら閉じ込める仕組みです。



参考文献：『昔のくらしの道具事典』P117

○ダイヤル式電話機

しょうわ ねん しょう
昭和60年（1985）ごろまで使用しました。

でんわ
電話をかけるとき、数字の穴に指を入れて

まわ でんわばんごう すうじ じゅんばん
回します。電話番号の数字を順番にひとつ

ずつ回してかけます。



○有線ラジオ

しょうわ ねん いいのちよう か くとう
昭和29年（1954）ごろ、飯野町、加久藤

ちょう まさきちょう ゆうせんほうそう はじ
町、真幸町で有線放送が始まりました。

このラジオは各家庭に1台あり、役場から

町の広報やNHK番組が放送されました。



○カラーテレビ

しょうわ ねん かくかてい しろくろ
昭和45年（1970）ごろ、各家庭では白黒テ

レビにかわってカラーテレビが普及しまし

た。

ばんぐみ
番組をみるときはダイヤルを回してチャン

ネルを選びました。



いっか だい のテレビは家族みんなの
たの 楽しみでした。

みたいばんぐみをめぐる「チャンネル
あらし 争い」もありました。



5. 夏の民具



夏

○蚊帳

夏の夜、蚊をふせぐためのものです。

麻など風通しのよい布でできており、

ふとんをしき、その上に蚊帳をつるしました。寝るとき、蚊がはいらないように気をつけながら蚊帳に入りました。



○蚊取器・蚊取線香

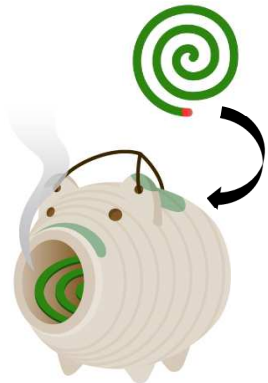
(蚊取線香は明治のはじめに日本で発明されました。)

蚊取線香を安全にたくための道具が蚊取器です。

よく使われていたのがブタの形の蚊取器でした。

除虫菊という植物を原料にしてうずまき型に

巻いて作ったのが、うずまき型蚊取線香です。



○うちわ

竹の骨に紙や絹を張り、手ににぎる柄がついたもの

です。手であおいで風をおこします。



○風鈴

家の軒下などにつり下げて、風にふかれると

すずしさを感ずる音がします。



6. 冬の民具



冬

ひばち ○火鉢

ひばち きとうき てき なか
火鉢は、木や陶器などで出来ています。中

すみび てへや あたた
に炭火をおいて、手や部屋を温めるのに

つか
使いました。

参考文献：『住まいとくらしの100年』P16



○こたつ

おき ほり
こたつは、「置ごたつ」と「掘ごたつ」にわけ

られます。右の写真は「置きごたつ」で、右

えの絵のようにふとんをのせてつか
使います。

参考文献：『住まいとくらしの100年』P16



ゆ ○湯たんぽ

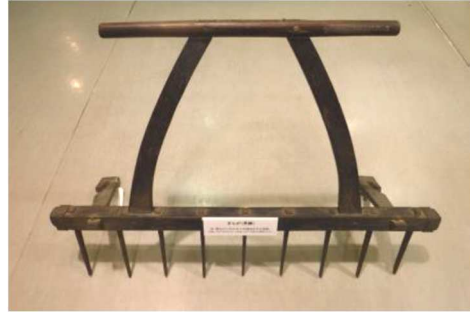
なか ゆ い ふとん い
中にお湯を入れ、布団などに入れて

あたた しゃんみぎ せい ゆ
温まります。写真右は「ブリキ製の湯

たんぽ」で、左は「陶器の湯たんぽ」です。



た はたけ みんぐ
7. 田んぼと畑の民具



すき
○犁

まぐわ
○馬鋤

方言：マンガ

うし うま ひ た
牛や馬に引かせて、田んぼを
たがや のうぐ
耕す農具です。

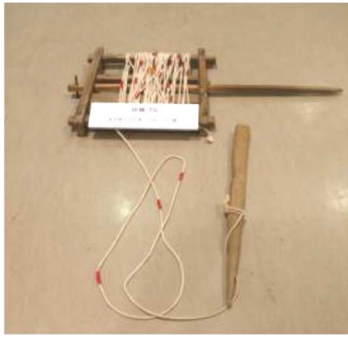
うし うま ひ た
牛や馬に引かせて、田んぼの
つち ちい くだ
土を小さく砕いてかきならす

すき さき かた つち ほ お
犁の先で固い土を掘り起こし
ます。

のうぐ よこぎ くし
農具です。横木に櫛のように
は つ
歯を付けたものです。

げんざい さぎょう つか
現在は、どちらの作業もトラクターを使っています。





たう づな ○田植え網

なえ う れつ ま
 苗を植えるとき列が曲がら
 ないように、なえ かん
 苗の間かくをそろ
 えるのにつか
 いました。



げんざい たうえ き
 現在は、田植え機を
 つか
 使っています。



とうみ ○唐箕

モミにまじるワラくずなどを
 かぜ どうぐ
 風でふきとばす道具です。
 とうにゆうぐち お
 投入口からモミを落としい
 て
 れ、手でハンドルをまわ
 ふうりよく せんべつ
 風力で選別していました。



げんざい
 現在は、コンバインを
 つか
 使っています。





せんば
○千歯

だい うご かないように あしおきを
 台が動かないように足置きを
 ふん くてい くしじょう はぶ
 踏んで固定し、櫛状の歯の部
 ぶん かんそう いね ほ
 分で乾燥した稲の穂をしご
 き、もみ お
 ぎ、籾を落とします。



あしぶ だっこくき
 ○足踏み脱穀機

あし ふ いた ふ ま なか
 足で踏み板を踏んで真ん中の
 ドラムを かいてん かいてん
 ドラムを回転させ、回転して
 いるドラムに かんそう いね ほ
 乾燥した稲の穂
 を 当て、もみ お
 を当てる、籾を落とします。

げんざい さぎょう つか
 現在は、どちらの作業もコンバインを使っています。



さくいん 索引

あ

あしづ だっこくき
足踏み脱穀機・・・16

あしづ
足踏みミシン・・・10

あんどん
行灯・・・9

いしうす
石臼・・・4

いろり・・・5

うちわ・・・12

か

かとりき
蚊取器・・・12

かとりせんこう
蚊取線香・・・12

かまど・・・4

かや
蚊帳・・・12

カラーテレビ・・・11

こたつ・・・13

ごえもんぶろ
五右衛門風呂・・・8

さ

じざい
自在かぎ・・・5

すき
犁・・・14

すみび
炭火アイロン・・・10

せきゆ
石油ランプ・・・9

せんたくいた
洗濯板・・・7

せんば
千歯・・・16

ぜん
膳（おぜん）・・・6

た

たうづな
田植え綱・・・15

たらい・・・7

ダイヤル式電話機しきてんわき・・・11

ちゃぶだい
ちゃぶ台・・・6

てお
手押しポンプ・・・7

とうみ
唐箕・・・15

な

ねずみとり・・・10

は

はがま
羽釜・・・4

はくねつてんきゅう
白熱電球・・・9

はしらどけい
柱時計・・・10

ひしゃく
柄杓・・・3

ひばち
火鉢・・・13

ひふだけ
火吹き竹・・・4

ふうりん
風鈴・・・12

べんじょ
便所・・・8

ま

まぐわ
馬鋤・・・14

みず
水がめ・・・3

めしびつ（おひつ）・・・6

や

ゆうせん
有線ラジオ・・・11

ゆ
湯たんぼ・・・13

<参考文献>

○書籍

- ・著 者：小林克（監修）
書 名：『昔のくらしの道具事典』
出版社：岩崎書店
発行年：2004年3月
- ・著 者：佐藤能丸/滝澤民夫
書 名：『日本の生活 100年の記録①住まいとくらしの100年』
発行所：株式会社ポプラ社
発行年：2000年4月
- ・著 者：平喜志男/押領司勲/西園安雄
書 名：『絵で見る くらしのうつりかわり』
発行者：えびのロータリークラブ
発行年：2000年10月



えびの市歴史民俗資料館では、
民具の展示をしております。
ぜひ、実物をご覧ください。





あしづ
足踏みミシン

発行/2022年2月

しれきしみんぞくしりょうかん
えびの市歴史民俗資料館

Facebook



Twitter



〒889-4311 宮崎県えびの市大字大明司2146-2 TEL/FAX 0984-35-3144